



[柴谷彰次長撮影]

謹
賀
新
年
平成二十三年

警察官の友

題字 岸 信介

警察官友の会

平成23年

新年交歓会開催される

毎年、新春恒例の全国警察官の友の会及び警察官友の会(東京)の新年交歓会が、1月6日、東京千代田区隼町のグラウンドアーク半蔵門において開催されました。

ご参加頂いた皆様は、警察庁は、安藤長官、坂口長官官房総括審議官、山下総務課長、三浦人事課長、今井広報室長で、警視庁は、池田警視総監、種谷総務部長、辻警務部長、久我警備部長、水本都警察情報通信部長及び上村総務部参事官以下各参事官、下田第一方面本部長以下各方面本部長が、また各県からは埼玉県櫻井会長並びに熊本県中尾会長、沖縄県宮城会長及び茨城県の五十嵐副会長、海

本会は、警察官の友となり、激励・慰問し、教育の向上を図り、また、国民の理解と親睦を深めるために生まれたものです。

野副会長、静岡県の塩澤副会長が参加され、このほか全国警察官友の会の賛助会員が全日警はじめ12社19名また、警察官友の会各支部会員の皆様に参加され、総勢300名の大勢の方々による交歓会が開始されました。

会の進行は、まず来賓の皆様をお迎えし、午後6時30分過ぎに開会となりました。

最初に磯邊会長の開会の挨拶(別掲)があり、次いで、安藤警察庁長官からは、今年の方針に沿ったご挨拶(挨拶要旨別掲)がありました。

この後、池田警視総監から乾杯に先立って挨拶(別掲)があり、総監のご発声で、会の発展を祈念して杯を上げました。

紙友随想

「飲酒運転のない

世界をつくるために」

飯田和代

私はNPO

法人MADD

JAPANの

飯田和代で

す。



講演中の筆者
飯田和代氏

MADD(マッド) | Mothers

AGAINST Drunk Drivi

ng(マザーズ・アゲインスト・ドラック・

ドライビング・飲酒運転に抗議する母親の

会)は、1980年に、飲酒運転の常習者

に娘をひき殺された母親が、当時のアメリ

カ社会の飲酒運転に対する緩慢さに怒りを

覚え、声をあげたのがはじまりでした。M

ADD(マッド)には、mad(腹をたて

て怒って)という意味も込められています。

飲酒運転は「犯罪行為」であり、「過失

による事故」ではない、との強烈なアピール

が多くのアメリカ国民の共感を得、根絶

への高まりが全米に広がっていきました。

連邦政府や専門家を巻き込み、具体的に実

利的な手法を駆使し、被害者支援や未成年者教育の分野にも、多大な貢献を果たしてきました。今では全米に六〇〇もの支部と二〇〇万人以上の会員を擁し、カナダ、スウェーデン、オーストラリア、プエルトリコ、日本に国際支部があります。

一九九七年、次女のみづほ(二〇歳)を飲酒運転の暴走車に奪われた飯田は、失意の中でMADDと出会い、二〇〇二年、同盟国日本支部の公認資格を得、代表となりました。「まさか、娘が…自分の娘が殺されるなんて…」起こりうるはずのない、まさかの出来事が私の人生を大きく変えました。

当時の日本は、飲酒運転による交通死も業務上過失致死として処理され、その八〇パーセント以上が罰金刑のみの略式起訴。

例に洩れず、みづほの命を奪った加害者も、大量の飲酒や道交法違反の裏付けがとれているにも関わらず、刑務所に収監される

ことも、正式公判すら開かれることもなく、収容されていた警察署から、たった二〇日後には釈放されていました。罰金額は五〇万円。当時の最高額であり、これが娘の命

の値段でした。私は、なすすべを失くし自分の無知、無力さを責めるのみでした。

みづほを亡くした翌年、犯罪被害者権利条約制定のための学会が東京ではじめて開かれ、私はそこで、連邦政府代表としてアメリカから来日したMADDの役員レジナ・ソヴィエスキー氏と出会い、その魅力的なプログラムに強く惹かれ、なんとしても日本に導入したいと心に決めました。

北米では、その頃すでに、悪質な加害者には殺人罪と同等の厳しい罰則が科せられるなど、飲酒運転自体が【犯罪】と見なされており、被害を受けた人々への支援サービスも多岐に渡っていました。英語を専門としていた私は、グリーフケアに関するMADDの資料を翻訳し、自分のホームページから公開すると同時に、実際の活動を学ぶために、テキサスをはじめニューヨーク、トロントなど北米にあるMADDの本部や支部のある街に滞在し、日本支部設立に向けての準備をスタートさせました。

「ピクティム・インパクト・パネル」とよばれる、被害者の視点から、違反者に話を聞かせるプログラムVIP【刑務所・少年院・警察署・地方裁判所などで定期的に開かれている、飲酒運転違反者への再犯防止プログラムのひとつで、失効した免許証を再取得するために連邦政府が受講を義

務付けているもの」にも、参加しました。

トロントにある未成年者の少女ばかりが収容されている少年院を訪れた日の光景を、今でも忘れることはできません。私たちの待つ部屋に入ってきた三〇人ほどの少女たちは、いずれも暗い表情をしており、私に向けられた視線からも、荒んだ過去が透けて見えるようでした。

『娘の帰りを待つことができるあなたのお母さんを、私は羨ましく思います。ここにいるMADDの私たちは、いくら待っても、娘や息子に会うことも、彼らの成長した姿を見ることもできません。子どもを失くした親の痛みに国境がないように、子と思う親の苦悩や慈愛の深さに差異はありません。生きていればこそ、やり直すチャンスがあることを、もう一度あなたの胸に言い聞かせ、二度と過ちを犯さない、と誓って下さい。』話し終えた私を見つめる彼女たちの目には、涙があふれていました。『こんな日が日本にも来るのだろうか?』その時の、率直な私の感想でした。

ところが、「刑事収容法」の改正に伴い、MADDのVIPを導入する少年院や刑務所が現れ始め、私の元には日本各地の施設から、依頼や問い合わせが舞い込むように

なりました。自分の命に代えて母親に託した娘の叫びが、ようやく関係者の耳にも届き、受刑者教育の効果的な手法として、日本の司法界からも注目される日が、ついにやってきたのです。

「すべての新しい道は誰かの熱い思いから始まる。」一九八〇年アメリカで制定された「ビクティム・インパクト・ステートメント」法の序文には、へ今でこそ、連邦政府のプログラムとして位置付けられているVIPだが、子を亡くしたひとりの母親と、ウエストコーストの判事の勇氣ある一声から始まったのだ」と、記されています。

わが国の飲酒運転事情も一〇数年前とはだいぶ様変わりをしてきました。道交法も改正を重ね、罪科も比べ物にならないほど重くなりましたが、厳罰化だけでは解決できないところに飲酒運転犯罪の根深さがあるのです。中でも、アルコール摂取の低年齢化に伴う若者の無謀運転と、アルコール依存症など常習飲酒運転者による危険運転は、どちらも高い死亡率に直結するだけに、防止策が急がれています。政府も酒害教育や未成年者禁酒教育に力を入れ始めました。文科省が各県に発令した「学校教育交通安全全モデル事業」もその一つです。講師とし

て選ばれたMADD Japanは、千葉県下はもちろん、日本各地の未成年者へ、「命を守るためにー大人になる前の君たちへ」というタイトルで、若年期の飲酒と飲酒運転の怖さをわかってもらおう授業を展開しています。

さらに加えて、「アルコール・イグニッション・インターロック」の普及にも、MADDは積極的に取り組んでいます。酒の気を感じたら、エンジンがかからない、このシンプルな装置が、命を守ります。二〇〇九年、オーストラリアで開かれた国際学会に日本代表として出席した飯田は、先進各国の取り組みの速さに目を見張りました。北米はもちろん、オーストラリア、EU諸国がすでに、エアバックやシートベルト同様、標準装備のパーツとして、全車両に搭載することを考えはじめていたからです。日本政府や自動車メーカーは、予防措置としての「インターロック・プログラム」を、ぜひ優先して実行されるよう、心から願います。

MADDの公認から十年。これまでの道のりは長く、険しいものでしたが、無我夢中で走ってきた私には、あつという間の風の流れるようでもありました。アメリカの

社会が、子を亡くしたひとりの母親の声を形にしたように、日本でも、なじみのない横文字の団体MADD Japanを支援し、ずっと見守ってくれる人々がいました。「あなたにできることをひとつだけ提供してください」、具体的な活動協力を呼びかける私たちに、手を差し伸べてくれたあなたのやさしさに勇気づけられ、ここまで歩んでくることができました。「凍える夜に熱い一杯のコーヒーをーありがとうの思いを込めてMADDから」年末年始を前に、北米MADDの各支部では、このキャッチコピーとともに、検問に当たる警察官にコーヒーのサービスをするキャンペーンがスタートします。

現場で危険な任務に当たる警察官の命が瞬時に奪われるのが、飲酒運転です。彼らは自分の命に代えて、市民を危害から守ってくれます。北海道オホーツク海に面した警察署長さんから頂いた年賀状には、「飲酒運転を根絶させるため、今年も厳しく取り締まり



飯田和代氏の近影

ます。」と書かれています。市民が眠っている深夜や早朝に、凍つく浜辺の道で検問をはる警察官の姿を想像してください。せめて彼らに熱い一杯のコーヒーを差し出すことが許されるまで、そして、アメリカMADDのように、現場で警察官とパートナーシップが組める日が来るまで、MADD Japanはがんばります。



辻警務部長より、総監感謝状の贈呈を受ける磯邊会長



市川渋谷署副署長へ慰問品目録を贈る武田支部長、堤副支部長



永家綾瀬署長を激励する松井支部長ほか支部の皆さん

「NPO法人MADD Japan理事長」

APPEC警備に出勤しこれを無事完遂された各方面警備本部員及び各署員の方々に対し、警備終了後、警察官友の会からささやかな慰問品を贈呈いたしましたところ、12月15日、辻義之警務部長から、警視総監感謝状と記念のメダルが伝達

APPEC警備激励

「NPO法人MADD Japan理事長」

ます。」と書かれています。市民が眠っている深夜や早朝に、凍つく浜辺の道で検問をはる警察官の姿を想像してください。せめて彼らに熱い一杯のコーヒーを差し出すことが許されるまで、そして、アメリカMADDのように、現場で警察官とパートナーシップが組める日が来るまで、MADD Japanはがんばります。

第六方面委員会

綾瀬支部

贈呈されました。なお、各方面委員会や支部等でも独自に激励・慰問を行っています。投稿を戴いた支部を紹介いたします。

（第五方面委員会及び本富士支部は機関紙12月号で紹介）



APEC警備協力に伴う感謝状とメダル

綾瀬署から精鋭部隊が出動されるため、11月5日、支部長はじめ支部役員ら6人が綾瀬署永家均署長を訪問、APPEC警備の完遂と署員の安全祈願を伝え、激励品を贈呈。（浅古長義副支部長記）

（松井隆三支部長）